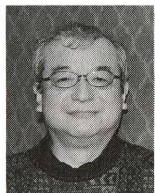


命より家族より
大事な仕事などない
 中西印刷株式会社
専務取締役
中西秀彦 ● なかにしひでひこ

私の父は子煩悩だった。印刷会社の経営者だったけれども、なにより家族を大事にしていた。だから、夕食にはかならず家族全員が揃った。そこで父は偉ぶるでもなく、政治思想から、科学技術まで幅広い話題で私達を楽しませてくれた。私は家族というのはそういうものだと思っ

て育った。
大学も自宅から通学したから、普通の家庭が家族で夕食をとらないことを知ったのは、東京で一般企業に就職してからだだった。日本の会社では平日に夕食を家族揃って食べるなど許されなかった。残業が毎日続き、残業でなければ、会社の人やお得意様達と会食になった。そして会食の場でさえ、なによりも大事なものは仕

父がそうだったように、夕食にはできるだけ家に戻った。子供ができたあとは、子供と接するのがとても楽しみだった。家に帰ると顔中を笑顔にした子供がハイハイして私に向かって突進してくる。その情景は子供が大きくなった今でも、はつきり思い出せる。

日曜には夫婦と子供達で色々なところへでかけた。科学博物館や緑の遊び場が多かった。鴨川に出かけてはたくさん鳥を見つけた。子供に「あの鳥はなんていうの?」と尋ねられて、答えられなかった私は子供と一緒に図鑑を繰って、鳥の名前を覚えた。それをきっかけに私はバードウォッチングを趣味のひとつにした。

父は常々言っていた。

「命より家族より大事な仕事などない」

家族を大事にする、は我が社の合い言葉でもある。だから我が社では平均労働時間は普通の会社にくらべてごくすくない。社員はそれだけ家で過ごす時間が多くなる。女性が育児休業を

事なのだ。すべてを会社に捧げなければ許してはもらえないのだ。

もちろん、それが嫌だというだけ理由ではないけれど、家業に従事する決心をして、私はサラリーマン生活に別れを告げた。故郷の京都に戻り、そして家庭を持った。

別に、家業がのんびりしていたわけではない。それなりに大変だった。ことに私が印刷会社の経営に参加したころには、業界は手作業の活版から、コンピュータを使った電子組版へと大変化を遂げるときだったのだ。

仕事で遅くなることもあったけれど、地方では会社と家の距離が近い。少なくとも東京での通勤の時間分家族と過ごす時間があった。私は

とるのは当然、男性でも育児休業取得者がいる。その分、中身を濃く働いてもらう。それが原因かどうか、中小企業にしては定着率が極めて高い。反面、短い時間で高収益をあげるためには他社と同じことをしてはいけないうい意識は社員に浸透した。結果として次々高度な新事業に挑戦する社風となった。多くの印刷会社が長時間労働の果てに疲弊していく中、なんとか持ちこたえている。この社風のままで行ければいいなと思うが、また日本が厳しい長時間労働の国に戻りつつあるのが気がかりだ。

そうそう、うちの子供は大学生になって家を出た。自分の好きな道に進んでいる。願わくは、良い伴侶を見つけて、次世代の幸せな家庭を築いて欲しいと思う。本当は日本中がもっと家族を大事にし、もっと子供を大事にしなければならぬのだ。そうでなければ、経済発展以前に、少子化の末、日本という国自体が消滅するのだよと大きい声で言っておきたいと思う。